

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

新しき葡萄酒

——マルコ伝第2章18～22節——

1964年6月7日

小池辰雄

断食と婚礼のご馳走 断食宗教 味の元 ご馳走の福音 罪をまた思わざるべし 罪を雲散霧消 聖霊維新 若き内村鑑三の気魄 十字架の恩寵の土台の上に 新月的存在 聖霊の饗宴宗教

【マルコ2・18～22】（私訳）

18 ヨハネの弟子たちとパリサイ人^{びと}とは、断食をしていた。すると、人々はイエスの御許に来て言うのに『ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちが断食するのに、あなたの弟子どもはなぜ、断食しないのですか』¹⁹そこで、イエスは彼らに言った『婚礼の子らは断食などできようか。新郎^{はなむし}がその人たちと一緒にいるのに。彼らは新郎と一緒にいるかぎりには、断食などはできない。20けれども、彼らから新郎が奪い去られる日がくる。そうしたら、その時こそ彼らは断食するであろう。21誰も晒^{さら}してない継ぎ布^{きぬ}を古着に縫^ぬいつけはしない。そうでないと、継ぎ布はそこから破れ、新しいものは古いものを引き裂く。そして、破れはもつと酷^{ひど}くなる。22また、誰も新しい葡萄酒を、ふるびた皮袋に入ればしない。そうでないと、その酒はその皮袋をはりさき、酒も皮袋もだめになってしまう。だから、新しい葡萄酒は、新しい皮袋なのである。』

●断食と婚礼のご馳走

18 ヨハネの弟子たちとパリサイ人とは、断食をしていた。

洗礼のヨハネは既に、非業の最期をとげたあとです。その洗礼のヨハネの弟子たちとパリサイ人は断食をしていた。

パリサイ人は、ルカ伝18章を見れば分かりますが、あの祈りの中で、

「自分たちは一週間に二度ほど断食をしている」

という。年に二回位はみなやるんですが、パリサイ人は「一週間に二度断食をする」と言っ
て、自分たちの宗教的な生活を誇っていたわけです。イエスは荒野で四十日四十夜断食
されたということが非常に著しい断食の例ですが。その他もちろん、自由にイエスは断食



をなさったと思います。それは、魂を凝らして神との交わりを深くしたいときに、自ずから、そういう意味における断食ということは、もちろん結構なことで自然なことなんです。霊的な自然なことです。特別に信仰的な戒めとして、戒律としての断食というようなことは、キリストは別に好まれない。イエスはいわゆる律法の世界に対して、自由の世界を展開された方です。

「御霊の在るところに自由あり」

ということです。御霊に導かれているキリストは、その性格は実に天衣無縫的な自由である。そういう意味において、いわゆる宗教的戒律という、当時の特にユダヤ教の硬化現象に対しては、これを根本的に改革する心を持っておられたわけです。断食を何ものかと思い、またいろいろな宗教的な行事を何ものかとしている、そういった在り方に対して、イエスはここに全然別な在り方の展開を始められたわけです。

すると、人々はイエスの御許に来て言うのに

ちようど今、断食の最中であつたわけですね。

『ヨハネの弟子たちとパリサイ人の弟子たちが断食をするのに、あなたの弟子

どもはなぜ、断食しないのですか』

これは律法に反するではないかと。

19そこで、イエスは彼らに言った『婚礼の子らは断食などできようか。新郎

がその人たちと一緒にいるのに。彼らは新郎と一緒にいるかぎりには、断食な

どはできない。

「汝ら、この喜びの音信を受けよ」

と、キリストが言われる。婚礼とかご馳走とか、そういうような譬えをもつてよくイエスは新しい自分の福音のことを言われました。この場合も、そうです。「婚礼の子ら」というのは即ち、イエスの福音を受けている者。私たちはみなこの「婚礼の子ら」である。これは本当に喜んで、饗宴に与かる者です。この饗宴に与かる者たちが、イエスたちの饗宴を拒んで断食なんかできるかと言う。非常に大胆な表現です。「新郎」というのはもちろん、彼は自分のことを諷しておられるので、新郎がその人たちと一緒にいるのに、どうしてその招かれた者たちが断食できるか。こないだ、「罪びとの招待」ということを学びましたが、正に婚礼に招待された者たちが婚礼のご馳走をいただく。ご披露のご馳走をいただくわけであつて、断食どころではないと。こういう話ですね。

一般の人たちが、福音というものを、本当の宗教というものを非常に誤解していることは、今でも同じです。キリスト教に入れば、何か堅苦しい——煙草も酒も飲めなければ、映画もあまり見てはいけないだろうというような——いろいろな意味においてこの世の楽しみが勝手にできなくなるというような気持で、宗教というものを敬遠して、それよりも文化の方がよろしい、文化文明の方がよろしい、というような先入感的な判断を持っているわ



けです。

けれども、イエスの福音は我々を縛るものではなくして、実は我々の魂も身体も、本当の意味において本来の自由者にさせ、天来の喜びに溢れさせるところの、そういう音信である。クリスチャンにも責任はある。そういった生き生きとした喜びと生命を持つていないものだから、

「まあ、キリスト教は……」

と言って敬遠されてしまう。我々自身に責任があります。どうか、皆さんは、くすぶったようなクリスチャンには断じてならないように。イエスは、

「断食する時にも頭に油を塗っておれ。いかにも断食しているような顔つきをしてはいかん」

ということを言っておられるように。断食をする時でも——何食わぬでなくて、何か食ったような顔で——断食は食わない方だから、大いにご馳走でも食べたような顔をして断食しているのが本当の断食なんだ。

●断食宗教

実にイエスという人は心の豊かな方です。キリスト教をキリスト教界が非常に一面的な、自分たちの作り上げたようなものにしてしまった。そういうことでは、この福音が伸びないわけで、新興宗教が非常に人を救っているのを見ると、とにかくそれが御利益にしろ、何か観念でないところの、人がとにかくそれに引きつけられるところの何ものかを持つているわけです。もちろん、強引な面もあるでしょうけれども、しかし単なる強引だけではないので、何かやつぱり人の心理に訴えるものがあるわけです。我々が一番素晴らしき内容をいただいているながら、パリサイ人や洗礼のヨハネの弟子たちみたいな断食宗教をやっていたのでは、くすぶったところの福音であつたなら、これは新興宗教に負けますよ。何も私は数のことを言いやしないけれども。

福音の世界は非常に高次なものを持つている。なかなかこれが非常に無条件で簡単であると同時に、またその深遠さは限りないものを持つている。そういう福音であるから、強引というわけではもちろんありませんけれども、しかし、誰でもが無条件にそれに飛び込むことができる、そういった質であるんですから、その質が証せられないようなことでは、これは我々が、このキリストが言う

「婚礼のご馳走に招かれている人」

らしくないわけです。

日曜日に、皆さんはそういう喜びをもって、もちろん来ていらつしやると思いますが、この集会には、お務めで来ていらつしやる方は一人もないと私は信じております。しかし、せつかくこの集会に展開を始めていながら——私は数のことを言うのではないが——しか



し、どうもまだ、全体の張りが足りない。どうか、皆さんがこの栄光と、またその責任を大いに感じて、いよいよやつていただきたいと切に願うのです。

●味の元

20 けれども、彼らから新郎が奪い去られる日がある。そうしたら、その時こそ彼らは断食するであろう。

イエスが、

「自分がお前たちと一緒にいるのに、あの人たちと一緒にいるのに、あの人たちはどうしてこの喜びを断つことができるか。私から喜んで、この神の天来の言と生命力を受けている。自由に限りなく伸ばすところの、展開するところのものが福音音である。新郎と一緒にいる限りは断食などできない。けれども、私が今に取られる時がある。新郎が奪い去られる日がある。」

と。「奪い去られる」という強い言葉が使っております。キリストがこの「奪い去られる」というような言葉を使われているのは、もちろんこれは十字架を意味しているわけです。

「自分に反するところの者たちが、自分を拉致して縛って、そして十字架につける。そういう時がある。そうしたら、彼らは断食をするであろう。」

と。しかし、一遍、断食をしますと、今度は本当にまた昔の、キリストが与えられたご馳走の——その時は直接にいただいていましたが——そのご馳走の意味が、その言葉の意味が本当に分かる時がある。

私は、自分の兄がこの信仰に入って、その生活がガラリと変わっていった姿を今でも思い出します。その当時は一緒に同じ部屋にいて——私は中学生でありましたが——兄は高等学校、大学生というわけです。兄は内村鑑三先生の集会に一人で行っていましたが、兄のその時の言ったこと、為したことがその時はよく分からない。けれども、その兄が去ってから、私はその意味が、またその生活態度がしみじみと分かってきた。

それは今度は、私が新しくこのキリストの福音に接して、そのご馳走が、その在り方が、キリストが言われるこの婚礼のご馳走がいよいよしみじみと味わわれてくる時がある。そのことはここには、イエスは言っておられませんけれども。この福音というものの素晴らしきは、私たちは直接に当時の地上のイエスには接しなくても、地上でもって証されたこの福音書のイエスの実存そのものなんです。当時、直接にキリストに接していた者たちよりもなおよく掴めてきているはずなんです。それは聖霊が来てからです。聖霊が来るときに初めて、その味が分かる。正に、この聖霊は「味の元」というようなわけです。

●ご馳走の福音

21 誰も晒さらしていない継ぎ布ぎれを古着に縫ぬいつけはしない。そうでないと、継ぎ布



はそこから破れ、新しいものは古いものを引き裂く。そして、破れはもつと酷^{ひど}くなる。

全くのま新しい継ぎ布を古い、少しくたびれているような布に継げば、それは破れてしまふ。そういうことを、その後に語っておられる。ということとは、自分の福音は断食の福音ではなくして、ご馳走の福音だと。イエスは、

「酒を好む者、食^{むさば}を貪^{むさば}る者」

なんて悪口を言われたような人です。葡萄酒を喜んで飲まれた。また、ご馳走を遠慮なく食べられた。ご馳走を出されて、できればみんな食べるのが、出した人はかえって非常にうれしいわけです。遠慮して少ししか食べなかったのではダメなんだ。妙な遠慮が日本人は、この頃はどうか知りませんが、ありました。

自分は新しい継ぎ布を与えているものであると言う。

22 また、誰も新しい葡萄酒を、ふるびた皮袋に入れはしない。そうでないと、

その酒はその皮袋をはりさき、酒も皮袋もだめになってしまふ。だから、新

しい葡萄酒は、新しい皮袋なのである。』

もし、新酒が入ると、その醗酵力によつて古い皮袋は裂けてしまふ。向こうでは、器は皮袋をよく使ったわけです。

今日は特に22節のところを主題にしているわけです。「新しい葡萄酒」の「新しい」という字はこの場合「ネオス」という字が使っていますが——新約聖書の「新」は「カイノス」という字です——この場合は、この「カイノス」という言葉を使つてもいいところなんです。新しくなつてまたすぐ古びるような新しさではなくて、イエスがこの場合、譬えをもつて言われているところの「新しい葡萄酒」というのは正に、古びないところの、常に新たなところの葡萄酒をもちろん意味されたわけです。

葡萄は、旧約から新約にわたつてイスラエルの大事な植物の一つであることはご承知の通りです。最後の晩餐においても、葡萄酒を捧げて、

「これはわが血である」

と言われたように、実に「新しい葡萄酒」とは、キリストのこの意味から言えば、「新しき血」である。「血」というのは生命の所在。

「血は即ち生命のあるところ」

と創世記9章にも書いてあります。そのような、生命のあるところのものです。キリストの血としての、新しき葡萄酒。そういうものを、この「新しき葡萄酒」という言葉において、私たちは捉えなければならぬ。断食、宗教は古き宗教であり、饗宴、宗教は新しき宗教です。キリストのは正にこの饗宴の——詩篇23篇にあるように、

「敵前^{むしろ}に筵^{むしろ}を張つてください」

という——饗宴の宗教である。



●罪をまた思わざるべし

少しく、この「新しい」ということの心を捉えてみたいと思います。まず、旧約聖書のエレミヤ記31章31節から読みます。

「31エホバいいたもう、みよ我イスラエルの家とユダの家とに新しき契約を立つる日きたらん。32この契約は我が彼らの先祖の手をとりてエジプトの地よりこれを導きいだせし日に立てし所の如きにあらず、

即ち、モーセに与えたところの契約。イスラエルの民は契約の民である。そのイスラエルの宗教は契約の宗教である。

我かれらをめとりたれども彼らはその我が契約を破れりと、エホバいいたもう。

即ち、イスラエルの民は、

「ヤーヴェーの神が夫で、その民は妻である」

という譬えは預言者ホセアが最も深く語っていて、このホセアの言葉をまたエレミヤがここで受け継いでいるわけですが。即ち、他の神々を拝んだりして、けしからんというわけです。

33然^{され}どかの日の後に我イスラエル^{うち}の家に立てんところの契約は此^{これ}なり。即ちわれ我が律法をかれらの衷^{うち}におき、その心の上に録^{しる}さん。我は彼らの神となり、彼らは我が民となるべしとエホバいいたもう。34人おのおのその隣とその兄弟に教えて汝エホバを識^しれと復^{また}いわじ。そは小より大にいたるまで悉^{ことごと}く我をしるべければなりとエホバいいたもう。我彼らの不義を赦しその罪をまた思わざるべし。」（エレミヤ31・31～34）

ここのとこを引用する人は、

「その不義を赦しその罪をまた思わざるべし」

という、この最後の言葉に非常な重みがあることに、うつかりすると忘れておりますが。イエスにおいて新しいとは、どういうことかという点、「その不義を赦しその罪をまた思わざるべし」という、そういう内容を持ったのが、この新しき福音なんです。キリストの新しさとは、キリストの音信の新しさとは何かというと、義をもつて審くのではなくして、「その不義を赦しその罪をまた思わざるべし」という、これがキリストにおいて新しい。

イスラエルの宗教ではどこまでも戒律をもつて、律法をもつて締めつけてくる。そして、

「罪、罪、罪」

と言って、やっている。今のキリスト教も——もちろん私たちは罪の概念をおろそかにするものではありませんけれども——いつも

「まだ私は、まだ私は」

と言って、消極的に自分の罪を見つめて、そして、何か恐がつているような恐れ方をして



いるのでは、いつまでたっても本当の新しきの展開はできない。福音の世界はもう、その「自分」なんていうものはや問題としない。「問題としない」ということは、もう「問題とする」というような、そんな罪ではない。問題を越えたところの罪びとである。そういう徹底的な罪の認識。その徹底的な罪の認識であるから、「もはや罪を思わない」という、そういうわけです。

だから、それは即ち神さまが

「不義を赦しその罪をまた思わざるべし」

と。このことは、旧約聖書の中であれほど罪を責め、忌憚きたんなく言う預言者たちが、またその反対に、全然それと反対な喜びの音信を既に予告しているわけです。

●罪を雲散霧消

イザヤ書44章21節を見ましても、

「21ヤコブよイスラエルよ此等これらのことを心にとめよ。汝はわが僕なり、我なんじを造れり、なんじわが僕なり、イスラエルよ我はなんじを忘れじ。22我なんじの愆とがを雲のごとく消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。なんじ我にかえれ、我なんじを贖いたればなり。」（イザヤ44・21～22）

「私は贖うから、帰って来い」

ではない。

「もう既に贖ったんだから、帰って来い」という。

「帰って来なければ、贖わないぞ」

というのでは、これはなかなか大変です、人間は。なかなか帰れない。なかなか悔改めができない。けれども、

「私は、お前が悔改めるよりも先に、既に贖ったんだ。だから、帰ることは、その音信を聞いただけで、もう帰り来るところの力が湧くではないか。喜びが湧くではないか」

と。そういうのが既に預言者に予告されているところの、福音の先駆的な音信です。神さまが私たちに本当にその喜びの生命を、その力を与えたくてしょうがないのに、いつまで自分を見つめているか。

「どんなにカサブタがあつたって、どんなにそこにまだ病痕が残つていようが、罪の痕あとが残つていようが、そんなものは問題でない。私はみんなそんなものは消してやる。私はみんなそれを雲散霧消してやるぞ。既に贖ったんだから、もう本質的には雲散霧消しているではないか」

と。アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤというような——私たちはこういう預言者の名前



を口ずさむだけで何か光を感じていますが——これらの預言者たちにおいて表れているところの喜びの音信の光をみな集めているのが、素晴らしい光を放っているのが、キリストです。「新しい」とは、ただ古いとか新しいとか言うのではなくて、質的に全く変化を起すところの、もう罪が赦され病が癒され、一切のそういった悪がもはや忘れ去られているところの、その事態である。

ヒルティーも『眠られぬ夜のために』のどこかで、

「赦されるだけでは、まだ私たちは本当ではない。神さまが罪を忘れてくださるということなんだ。すつかり、それをもはや念頭から去ってくださる。だから、それが本当の罪の赦しの完成である」

というようなことを言っていたと思いますが、正にその通りです。ダンテが描いているあの煉獄の上の、浄罪山の上の方で、レーテの河とエウノエの河とが流れている。レーテの河におきましては、忘却である。悪の忘却である。また、エウノエの河では、善の憶出であると言われているようなわけです。

●聖霊維新

この新しさというのは正に、エレミヤ記31章31節以下に書いてあるところの、

「もはや律法を石の上ではなくて、新しき律法を即ち心の上に記す」

という、その「新しき律法」というのは、神をそのような神として本当に知る。恩寵の神として知るわけです。

即ち、新しさというこの内容は、新しき霊、新霊である。霊の新しさ。新しき霊によって、霊の新しさによって、仕えることができるから、そして、

「御霊のある所に即ち自由あり」

と、コリント後書5章かどこかに出ているようなわけです。

この新しさということを非常にはつきり言っているところが新約聖書の、あまり普段は見ないところにある。テトス書3章4節から、

「4されど我らの救主なる神の仁慈と人を愛したもう愛との顕れしとき、⁵⁶我らの行いし義の業にはよらず、

私たちの律法の義の業ではなくて、

唯だその憐憫により、更生の洗いと

これは聖霊のバプテスマのことです。

我らの救主イエス・キリストをもて、豊かに注ぎたまう聖霊による維新にて我らを救い給えり。」（テトス3～6）

「聖霊による維新」という言葉。明治維新というのは私たちは知っていますが、聖霊による維新です。聖霊維新です。聖霊の維新。聖霊によって新たにされる。



●若き内村鑑三の気魄

内村鑑三先生が『聖書の研究』という雑誌を出したのが明治33年9月30日ですが、それとほぼ並行して明治34年3月10日に第1号『無教会』という3段組み8頁のものを書いている。全部、先生のものではないですよ、いろいろな人が中に投稿していますけれども。これが18号でお終いになっている。これは『聖書の研究』と並行して、特に家庭的に読ませるんだなんていうことが書いてある。そこに

「無教会。内村鑑三編集。孤独者の隣人、家庭宗教美文の小冊子」

と書いてある。昔のものを今読むと、こういう時にこんな言葉を使ったかと思うと、なかなか面白い。この『無教会』という雑誌の第13号のところに、こういうことが書いてある。

「もし、神の聖霊が信者の心の中に強く働きませんでしたならば、キリスト教はとつくの昔に消えてしまったものであります。同じように、キリスト信者の信仰なるものは、説教や儀式くらいの力でつなげるものではありません。神の聖霊、大いに我らの心にくんだり、悪魔の万軍は立って我らを砕かんとするとも、我らをしてキリストの愛より離れざらしめたもうが故に、我らは今日まで信仰を維持してることができたのであります。教会をもつて信仰維持の必要事とみなす人は、神の聖霊の力を軽しむる人であると思います。こう言つて私は何も教会の要を認めないではありません。人は類をもつて相集まるものでありますから、同一の主義と信仰とを抱く者は自然と相集まつて団体を作るものであります。教会は成るものであつて、作るべきものではありません。天然の成長でありまして、人為の製作ではありません。神の聖霊に導かれて期せずして成つたものが真の神の教会であります。

ここに、若き内村鑑三の気魄が表れています。

教会は信仰を集める所と思うのが、そもその間違ひの始めであります。教会は信仰を集める所ではありません。信仰を表白する所——告白する所——これを他人に分かつ所であります。私どもは他人より益を受けんために教会に行つてはなりません。これは与えんために、できるだけの善をわが兄弟姉妹に分け与えんとて、そこに行かなければなりません。……キリスト信者は主イエス・キリストより直ちに霊の賜物を受けるものですから、これを教会または牧師の手より受ける要はありません。彼は与えるために教会を建て、またこれに集つものでありますから。

「彼」というのはキリスト信者ですね。

その活動の原動力とはなりませんが、決してそのやっかい者とはなりません。」

教会に行つて、そのやっかい者になるような信者ではダメだ。自分たちがそれを担つて、展開して行くところの者でなくてはいかんと。私たちがいつも言っているようなことを、先生は言っておられる。内村先生もこのところで大いに聖霊のことを強調しておられる。無教会のことを一筆書いてくれ、というから、このところを引用して、



「果たして、今の無教会は、この若き内村鑑三のような気持とどうであるか、大いに反省すべきである」

というようなことを私は書いてやった。内村先生のこの気魄で——もちろん、先生は晩年まで気魄を持っていましたけれども——聖霊の本当の証し人として、私たちは互いにここでもって集まる。また人を本当にここに引張って来て、そして、集会そのものが本当に神の饗宴に与かり、そのご馳走を食べさせてやるという、

「さあ、ご馳走を食べさせてやるから、来なさい。来たりて見よ。来たりて食らえ。来たりて飲め」

というような気魄を持って、あなた方はいよいよ臨んでいただきたいと思うわけです。

●十字架の恩寵の土台の上に

これが、キリストが言われるところの「新しき葡萄酒」です。パウロがテトスに書いた心のように、

「豊かに注ぎたまう聖霊による維新」

こそ顕れてきた。我々が救われ、新しくなっているのは正に、御霊が臨むことにおける新しきで、その他のいかなる新しさでもない。御霊は、即ちキリストの罪の赦しという新しさの土台の上に、即ち十字架の恩寵の土台の上に、この聖霊の維新ということが一緒に事実となって生ずるわけです。我々が聖霊を本当に喜んで受けられるのは、罪の赦しというこの新しき土台による、本当の我々の魂の新しさです。

「新しき靈魂を起こしたまえ」

という、詩篇51篇の祈りにある通り、それが新しき霊です。新しい霊を注いでくれるという。また、コリント後書5章14節から、

「¹⁴キリストの愛われらに迫れり。我ら思うに、一人すべての人に代りて死にたれば、^{すべ}凡ての人すでに死にたるなり。

キリストが葬られた。十字架の死です。

¹⁵その凡ての人に代りて死に給いしは、生ける人の最早^{もはや}おのれの為に生きず、己に代り死にて甦えり給いし者のために生きん為なり。¹⁶されば今より後われ肉によりて人を知るまじ、かつて肉によりてキリストを知りしが、今より後は斯^{かく}の如くに知ることをせじ。¹⁷人もしキリストに在らば新^{あらた}に造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、視よ新しくなりたり。」（コリント後5・14～17）
この場合の「新しい」という字は「カイノス」という字です。

「視よ、新人となった」

という。

「もしキリストに在らば新^{あらた}に造られたる者なり」



と。新創造である。新しき創造である。アダム・イブは、人は神の似姿に造られたけれども、その似姿は全然、神の姿から——全然とまではないにしろ——非常に神の姿からうすれてしまった。幼児を見てごらんない。まだ、幼児の中には完璧なものがそこに見えますけれども。私たちが本当に神的になるときはやはり、自分が無私の境地に入ったときに、初めてその人は神らしくなってくる。

その創造、新創造、第二の創造ということです。この「新しい」とは、「キリストにおける新しさ」とは即ち、新しき創造が、第二の創造が我々の中で成される。これはコリント前書15章をご覧になっても、その境地が分かります。ガラテヤ書にも、

「我、キリストと共に十字架につけられたり。我もはや生くるにあらず。キリスト我が内に在りて生くるなり」(ガラテヤ2・20)
と、書いてある。

新生に甦る。これはローマ書6章あたりにも出てきますけれども。「死へのバプテスマ」と「生命へのバプテスマ」ということ。それは言い換えれば、聖霊のバプテスマです。聖霊のバプテスマを受けて初めて、この新生ということが出てくるわけです。聖霊のバプテスマによって、この聖霊を浴び、聖霊を飲み、これが即ち、

「新しき葡萄酒を私たちが飲む」

ということ。そういう新創造が、死んでも死なないところの生命が、そうしたすがすがしき、自由というものが——その土台にはどうしても、さつき言った、

「一切の不義が赦され一切の病が癒される」

ということがある——キリストを受けとると、根源現象として我々のうちに起きてきている。そして、その直接的な内容を、キリストの贖罪死ということによってこの自分が葬られ、そして新しくキリストの聖霊という葡萄酒によって、キリストの新しき血によって新生せしめられて来たら、これはくすぶってなんかいられないですよ。

●新月的存在

その力は、その生命は、その新しさは——ここに現れてきたところの三日月形の光は、新月は必ず満ちていくところの——ここに新月が出てきたならば、必ずこれは満月となる。我々は満月に向かって進んでいるところの新月的存在です。皆さんは、新月になっている新月的存在です。新月的存在として、今、光りつつある。光りは増すものである。何となれば、キリストの恩寵の聖霊の光ですから、これは、どんなにこちらが暗黒に見えなくても、必ず勝つ。必ず満月になる。その「必ず」が言えないならば、それは聖霊を受けていないということです。「自分の信仰」なんてやっていたら、それはダメです。

無教会がいくら力んでやっていまして、それは『聖書の研究』や『聖書知識』だとか、いろいろなことがなかなか才能的に優れているから、持っているけれども、そんな持ち方



は本当の持ち方ではない。本当の持ち方はそんな才能で持っているような世界ではありません。皆さんは本当にもう一つ次元の高い——コリント前書1章、2章に出てくるところの、聖霊は神の国まで引き上げてやまないとところの、そして、キリストの姿に化せられてやまないとところの——そういう事態ですから、預言者的な使徒的な次元は、もう次元が違う。そうでなかったならば、そういった絶対的な次元というものを私たちが御霊において持たないならば、どんなにそれが続いて、無教会なんて言いまして、それはダメです。どうか、そういう意味あいで、内村先生も閃きはあったけれども、その閃きがもつと常恒的にぐんぐん進められて行くことは未だしであつたと、私は歴史的にそう言っていると思う。

それですので、皆さんが、この集会をしていて、それだけの実質を自分のうちに宿さないような青年であつたらダメです。特に私は、青年諸君のこの戦いの、聖霊におけるところの力強い前進というものをもつと要求したい。どうか、大いに自覚を新たにしていたいただきたい。この御霊の世界の祈りとなつたならば、或る時は徹夜して祈るくらいのことを自分でやってみてください。また、友人たちと山の中に入つて本当に神に祈ることもいい。

「生命を賭けて我に近づく者あらんや」

と、エレミヤ記の素晴らしい言葉がある。

「我なんじらに近づく。生命を賭けて我に近づく者があるか」

と。

「生命を賭けて本当にその聖霊において私は行きます」

という、その求めを持たなかったら、それは信仰なんて言つたつて、つまらんです。五十歩百歩です。

●聖霊の饗宴宗教

そういう意味における、新しき葡萄酒を、どうして古い皮袋に入れてなんかいられるか。

「この新しい葡萄酒を、お前たちは本当に新しく受けとる。その受けとる皮袋になつてくれ」

と、キリストは言つておられる。それで、真つ向から、パリサイ的な戒律宗教に対して、この饗宴宗教をもつて、聖霊の饗宴の宗教をもつて戦う。これは聖霊の饗宴ですから。聖霊の饗宴をもつて彼は臨んでおられる。どうか、そういう張りをもつていよいよ進んでいただきたいと思います。

ヨハネ黙示録21章のところに、

「我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。¹我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。²また大なる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、



人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在^{いま}して、⁴かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん、今よりのち死もなく、^{かなしみ}悲歎も、^{さけび}号叫も、^{あつた}苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』⁵斯^{かく}て御座^{みくら}に坐し給うもの言いたもう『視よ、われ一切のものを新にするなり』また言いたもう『書^{しる}き録せ、これらの言は信^{まこと}すべきなり、真なり』（黙示録21・1～5）

これはもちろん、終末の最後の新天地の光景を表す、ひとつの暗号的な言葉をもつて語っておられるわけです。けれども、聖書はいかなる未来的な現実でありましても、全部それは現在の現実、終末の現在として、それを私たちは受けとらなかつたならば、聖書は本当に読めていない。黙示録はもちろん、素晴らしい未来的な黙示を語られているけれども、この未来的黙示は、我々が本当にこれをタッチするためには、それはどこまでも質的に現在の、終末的現在として、これを受けとつていなくてはダメなんです。

地上におきましてはもちろん、涙もあるし、^{かなしみ}悲歎もあるし、いろいろなものがあります。けれども、聖霊の宿るところには——どんなことがあつても決して行き詰まりを来たさなところの、必ず成るところの——悲しみを喜びに変え、暗きを光に変えるという変質する原動力を、この聖霊という驚くべき神の生命が、キリストの生命が持っている。聖霊をそのようにして宿す者が、創世記から黙示録に至るまでを本当に読める。聖霊を宿していなかつたら、聖書は本当に読めない。聖霊を宿していれば、すべてこれを現在として受けとることができる。それが本当の現実として、内的現実でなくて本当に内外即したような現実として生成してくるのは、これは神の国が来てからの話です。しかしながら、^{内的}内的現実としてこれを受けとるのは、今なされていなければ、神の訪れはいつまでたつても本当のものとならない。

そういう意味において、

「神の幕屋が人と共にあり」

という。「キリストの幕屋」はわが中に展開したもう。我々の「幕屋」という表現が、その意味において、今、私たちがこの「^{聖霊の幕屋}聖霊の幕屋」を張っている。そこにおいては、

「生命の水を泉より飲む」

と、ここに書いてある通りである。渇くことがない。飢えることがないという新天地が既に我々の現実として受けとられる。私たちはそのような「新しき葡萄酒」を、このキリストの本当の聖霊をいつも飲み、キリストの霊気を常に吸って、そして、

「我は常に新人である。もはや旧人にあらず」

というわけです。本当にそのキリストの言葉に即して、そのキリストの言葉を本当に食らっていく。そういった我々は断食宗教にあらずして、饗宴宗教である。聖霊の饗宴宗教の人らしく、自由に生き生きと証して行きたいと切に願う次第です。おわります。

